

《九》日本の伝説①

一 要約の解答例

日本は伝説が多い国だが、次第に語り手が少なくなってきた。それを惜しんで、私はこの本を書いた。昔話は動物のように日本国中に散らばっていくが、伝説は植物のように土地に根を生やして成長していく。歴史はそのような伝説を利用して整理されていく。歴史が整頓されていくと、伝説の野山は狭くなるが、しかしそれもまだほんの少しであり、伝説のまま残されているものが多い。子どもたちは面白い話だけを読んで楽しんでほしい。

◆【解説】

◇要約文を書く際の3つのポイント

(1) 情報を圧縮する

■ 主要な情報・主張を残し、長い説明(例…「五人や十人もいた」「雀や頬白は皆同じ顔」など)を省いている。

・ 日本の伝説の現状(豊富だったが失われつつある)

・ 伝説と昔話の広がり方(伝説⇨植物的、昔話⇨動物的)

・ この文章が書かれた目的(忘れられるのを惜しみ、子どもたちに価値を伝えるため)

(2) 転換点に注目する

■ 「以前」から「近頃」への変化、すなわち伝説が失われつつある現状について、要約文の冒頭で、短く明確に示している。

(3) 「鍵となる情報」を漏らさない

■ 伝説が失われつつあること、伝説を「植物」、昔話を「動物」への例え

伝説が特定の土地に根付いていること(地方伝説)。

歴史(農業)が進むと伝説(野山)が狭くなるという関係性。

二 ①の解答例

①昔話は自由に移動する動物のように、日本の中のさまざまな地方に伝わり広がっていくから。

◆【解説】

「昔話は動物の如く」該当箇所を特定し、その直後の文の説明が答えになると推測できる。その後、「昔話は方々を飛びあるくから、どこに行っても同じ姿を見かけることが出来ますが、伝説はある一つの土地に根を生やしていて…」とある。ここでいう「動物」は、特に「雀や頬白」などの「小鳥」として例示され、「可愛い昔話の小鳥は、多くは伝説の森…の中で巣立ちます」といった移動する特性が示されている。

これらのことから、動物(特に鳥)が自由に場所を移動するように、昔話も「方々を飛びあるく」性質を持ち、その結果「どこに行っても同じ姿を見かける」ことに着目したい。

二 ②の解答例

②伝説は根の生えた植物のように、ある土地に根付いてそこで常に成長していくから。

◆【解説】

この設問も文章の中から「植物」の比喩的な表現について書かれている箇所を特定し、その内容を要約する必要がある。次に、その箇所から、「伝説が植物に似ている点」を抜き出す。「ある一つの土地に根を生やしていて」「常に成長して行く」等）それらを比喩として、伝説は特定の土地や場所に結びついて存在し、時間が経つにつれて、その土地で変化したり、内容が加わったりしていくことから、設問に対する理由としてまとめている。

《十》日本の伝説②

一 要約の解答例

昔の人々は、水を確保するために川や池に出かけたり、笥を架けて水を引いたりしていたので、離れた所に住むことができなかった。地方を行脚していた空也上人は水を見つけることが上手で、多くの村々で良い泉を見つけては土地の人々に念仏の教えとともに伝えた。土地の人々は念仏の合唱とともに水の恵みと念仏池の不思議を思い、そこに神様を祭った。泉周辺と念仏の信仰が結びついたのはそのためかもしれない。

◆【解説】

◇要約文を書くにあたって、本文から読み取りたいこと

(1) 情報を圧縮する

■特に、冒頭の水に関わる記述・説明を圧縮する必要がある。水の確保の難しさを念頭に置き、「水は川や池、笥に頼っていた」ことに焦点を絞っている。

(2) 転換点に注目する

■「旅の人は水を見つけるのが上手で、井戸を掘ることを教えた者もいた。特に空也上人は多くの村に良い泉を見立てて感謝された。」という情報に着目する。これは昔の人々の「下手さ」から「上手な者（旅人＝空也上人）」による技術や場所の伝播への転換が表されている。

(3) 「鍵となる情報」を漏らさない

■「念仏の教えを広げ伝えた空也上人。後の人々は、清水を汲むたびに上人の名を思い出した。それは、その水辺で念仏の行がしばしば行われたため。」

しかし、結論的な主張としての「その以前から、人々は水の恵みを大切に感じて神様を祭っていた。むしろ、その水の信仰が念仏の信仰を泉の辺に引きつけたのかもしれない。」といった箇所は、必ず着目したいところ。

《十一》日本の伝説③

一 要約の解答例

伝説によると、空也上人より多くの泉を見つけた御大師様という人がいるが、多くの土地

で御大師を弘法大師のことだと思われる。実際の弘法大師は遠方を旅することはできなかったはずだが、全国各地に弘法大師が残した泉や不思議話が残っている。日本中を歩きまわり、どこでも同じような不思議を残していくことを、人々は、神様だと思わず、誰か昔の偉い人にちがいない、それは弘法大師であると想像したのではないだろうか。

◆【解説】

◇要約文を書くにあたって、本文から読み取りたいこと

(1) 情報を圧縮する

■文章後半にある具体的な地名やエピソード(能美郡、粟津村、鳥越村、花阪、打越、吉原、入間郡、吉川、川場温泉の事例)は、すべて一つの伝説のタイプ(清い泉を与えた話)を裏付けるための具体例として機能しているが、これらを「全国各地に弘法大師が残した泉や不思議話が残っている」という一句に集約した。

また、「良い姥と悪い姥」の対比(舌切り雀や花咲爺との類似)についての言及も、水の伝説が持つ物語の類型を示すものとして要約では含めず、主題である「弘法大師と泉の関連」に焦点を絞ることで、文章量を大幅に削減している。

(2) 転換点に注目する

■はじめの「伝説によると、空也上人より多くの泉を見つけた御大師様という人がいるが、多くの土地で御大師を弘法大師のことだと思われる。」という内容に対して、「実際の弘法大師は遠方を旅することはできなかったはずだが、全国各地に弘法大師が残した泉や不思議話が残っている。」という対比した内容が書かれている。筆者の考察として「日本中を歩きまわり、どこでも同じような不思議を残していくことを、人々は、神様だと思わず、誰か昔の偉い人にちがいない、それは弘法大師であると想像したのではないだろうか。」とある。

これは、「伝説」と「事実(歴史)」の間の矛盾(歴史上の弘法大師は遠方に行けなかったはず)を提示することで、「なぜ伝説が生まれたのか」という筆者の考察に読者を導く、論理的な流れを構築してる。

(3) 「鍵となる情報」を漏らさない

■この文章で筆者が読者に伝えたい鍵となる情報は、「伝説の弘法大師」の正体や背景に関する筆者自身の推論である。「事実との乖離(弘法大師(空海)は歴史的に遠方まで旅できなかったという事実)」と「伝説の類型(全国各地に似たような「杖で水や湯を湧かせた話」が残っていること)」という矛盾について、「人々は、この超人的な偉業を『神』ではなく『誰か昔の偉い人』のしわざと考え、その代表として弘法大師に結びつけやすかった(想像しやすかった)のではないか」という見解を推論として示している。

二 解答例

弘法大師は中国で修行をした後、高野山を開き、書物を書き、多くの仕事を残したが、日本中を遠方まで旅することはできなかったはずである。しかし、全国各地に弘法大師が残した泉や不思議話が残っている。日本中を歩きまわり、どこでも同じような不思議を残していくことを、人々は、神様だと思わず、誰か昔の偉い人にちがいない、それは弘法大師であると想像し、それが伝説として言い伝えられたのではないかと考えられる。

◆【解説】

まず、問われていることは「なぜ日本国中に大師と水にまつわる伝説が残っているのか」についてである。これに答えるには、単に事実を並べるだけでなく、筆者が提示する「理由」と「推論」を書き出す必要がある。

前提として、歴史上の弘法大師（空海）には広範囲の旅は不可能だった事実がある。しかし、伝説上の弘法大師は全国の村々に清水を与えている。歴史的な事実からすると、伝説で語られている現象は人間業としては不可能であり、本当に空海が行ったことなのかという疑問を、筆者は述べている。筆者は、「人々は、誰か偉大な人物が残した不思議な行為を、最も想像しやすかった弘法大師に結びつけた」とし、伝説が生まれた理由を推論している。これらの内容を適確にまとめて記述したい。